

## 図書 紹介

### 不安の構造 リスクを管理する方法

著者：唐木英明（公益財団法人食の安全・安心財団）

発行：(株)エネルギーフォーラム／〒104-0061 東京都中央区銀座 5-13-3／

TEL03-5565-3500／新書判／247頁／価格 900円（税別）／2014年4月26日発行

安全と安心は、セットで使う場合が多い。安全とは、事実を示す言葉で、危険がないか少ない状態、一方、安心とは、人の心の様子を示す言葉で、危険を予感せず、不安に陥る状態を指す。しかし、安全と安心は、必ずしもイコールではなく、むしろ大きく隔たっている場合も多い。日本社会は、科学技術の発達より豊かな生活を手に入れて、安全が確保されてきているが、依然として多くのひとがさまざまな不安を抱えている。

本書では、不安である放射能の風評被害、BSE、食品の偽装表示などの問題の原因を取り上げ、そのリスク管理の方法について論述している。

第1章 不安の構造は、将来の不安／豊かさと安全／不安と恐怖／直感／聞かれて出てくる不安／不安社会についてである。古代社会において権力と衣食住に満ち足り、それでも老いと死を恐れ、不老不死の霊薬を求めて続けた始皇帝の話から始まる。現代日本の我われの生活に始皇帝が夢にも見なかったほど豊かで便利で安全になっている筈なのに不安を取り除くことができない。統計データから現代日本が過去と比較していかに安全性を高めてきたか、一方で今もなお人々が不安を抱えている事実を指摘し、その心理的要因が分析されている。

第2章 科学技術の影は、科学と技術／科学の不正／見えないリスク／検査と表示／想定外／賢い利用についてである。科学技術の発展に伴う環境汚染等の負の部分(影)について色々取り上げられている。STAP細胞の話から「正しい科学」、「未科学」、「間違い科学」および「ニセ科学」の4種類の科学に及ぶ論述は興味深い。

第3章 リスク管理は、安全を守る仕組み／リスク管理者の交代／冷たい計算／理想と現実／難解な仕組み／危機管理／本当のリスクについてである。「リスク評価」とは、価値判断を差し挟まず、あくまで客観的にリスクの存否・程度・確率を判断することであり、「リスク管理」とは、リスクを低減させるための手法を決めることである。前者は、科学の仕事であり、後者は政治、行政又は世論の仕事である。

第4章 放射能と健康は、放射線の基礎知識／放射能汚染／牛肉汚染／放射線の規制／

原水爆実験／国民感情／チェルノブイリ／横浜市広報／風評被害について、第5章 BSEは、英国のBSE／新型ヤコブ病／全頭検査／日本のBSE／米国のBSE／国会議員の誤解についてである。近年、重大な健康被害の「可能性」が問題となった福島原発事故およびBSEの事例について、科学的な事実と社会的な不安のギャップ、ともすれば後者に引きずられる政治状況について解説されている。

第6章 誤解の損害は、中国産輸入食品／「天然・自然」信仰／生肉ユッケ／こんにゃくゼリー／サプリメントについてである。消費者側の誤解である本当は小さなリスクを大きなものと受けとめて過剰反応するケース（例えば残留農薬や食品添加物）と逆に大きなリスクを過小評価するケース（例えば生肉ユッケ）を取り上げられている。

第7章 商売と偽装は、食品偽装／メニュー誤表示／個人の感想についてである。事業者側の不適正行為として平成10年代後半から現在に至るまでに頻発した食品表示を巡る問題、例えば牛ミンチと表示して別の食材で水増しして売るなど消費者の信頼を根本から損なったミートホープ事件や昨年秋に世間を騒がせたレストランメニュー誤表示問題が取り上げられている。

第8章 誤解との戦いは、あるある大事典／ホメオパシー／美味しいぼについてである。科学的知見に合致しない情報で社会をまどわす三つの言動、「発掘！あるある大事典」のデータ捏造問題、代替医療ホメオパシーの浸食及び「美味しんぼ」の遺伝子組み換え作物の取り上げ方について、著者自身が抗議に関わった状況を記述されている。

第9章 リスクコミュニケーションは、情報共有と対話／欠陥モデル／曲学阿世の徒についてである。科学は万能ではない、間違ふことは科学者自身が誰よりもよく知っている。STAP細胞問題のように科学には、自身の間違いを正す「検証」という仕組みがあり、故に科学は信頼性が高いのである。しかし、科学はまだ自然現象のすべてを明らかにするほど進歩していないから、科学的な不確実性がつきまとうことを理由にだから科学は信用できないという意見もある。不確かな危険情報の蔓延を避ける上で正確な情報の共有がリスクコミュニケーションの基礎である。

本書は、安心・安全・信頼とその対にある不安・危険・不信について、食品を中心に科学者の立場から分析し、日本社会に漠然と横たわるさまざまな不安への対処法をリスク管理の視点から論述しており、読みやすく、内容も濃く、考えさせられる一冊である(学会事務局)。